

愛し得ざる者の悩み

二羽の雀

ある人が二羽の雀を捕えました。そして籠に入れて十日ほど飼っていました。なかなか来なれて来ませぬ。ある日でした。一人の青年がその家に来ました。そして籠の側に行つて見ました。雀はおそれてばたばたしますので可愛想に思いました。出してやりたいと思いましたが、そのまま自分の家に帰りました。けれども今の雀のことが忘れられませぬので、又雀を飼つてある家に来ました。そして独り考えで、静かに籠の側に行つて戸を開いて二羽の雀を放つてやりました。その青年は満足してかえつてゆきました。雀の飼主はその成り行きを見ていましたが、「雀を捕えて飼つていたのは、如何に雀が人間に馴れて来るかを見たいためであつた。それにあの男は、無断で雀を籠から出してしまった。雀が惜しいと言うわけではないが、一体あの男の心はどういうつもりだろう。」と言いました。

小さい出来事でも

この小さい出来事を聞いた私は考えずにはいられません。小さいようでもこの事件の内に様々な世界と気持を見ることが出来ます。この二羽の雀を出してやるのがよいことであろうか。悪いことであろうか。またもしその青年が私であつたら、果して雀を出してやつたであろうか。あるいは出してやらないであろうか。私に出す権利があるであろうか。そう考えて見る時、単純な問題ではない。

存在の意義

雀は害鳥であるから殺した方がよい。捕えて飼う位は何でもない。そういう心が人間を支配する。一応はもつともだが、しかし、果して雀が害鳥であろうか。よし又雀が害をするにしても、その雀が生きてゆくことを否定しようとする権利が人にあるか。人間のためにならぬものは殺してしまえ、地上に雀などはいないようにせよとはあまりに人間本位のわがままではあるまいか。地上の万物は浜の砂子まで存在すべき使命のないものはない。厳として存在の権利があり意義がある。それを人間のためにならぬとて殺してしまうのは愛ではなくて、経済であり、勝手であり、人間本位の考えである。それならば出してやるのが本当だろうか。

この心これ愛

昔支部のある王が孟子に道を聞いた。それはこうである。ある王が御殿の上から祭のために犠牲になる牛が引かれてゆくのを見たことがある。哀れにも神の祭壇の供物として引かれてゆく牛を見て、王はたまらなく可愛相に思ったので、家来をよんであの牛を殺さずに助けてやれと命じた。家来は「それでは祭が出来ませぬ」と言ったので、それでは「羊を牛のかわりに使え」と言った。家来たちにはその王の気持が知れなんだ。「王は牛を惜んで羊を使うのだ。王はケチなのだ。」という者もあつた。この問題を提げて王は孟子に、その正否善悪を問うのだ。

それに対して孟子は「その心こそ愛であります。王は今現に祭壇にひかれてゆく牛は見たけれども、まだ羊は御覧にならぬのであります。だからその牛を殺すにしのびなかつたのである。これが愛の道であります」とほめた。私は二羽の雀の事件についてこんな話をも思い浮べて見た。

机上の空論か

二三人の人にこの話について「あなたならどうしますか」と聞いて見た。

甲「私も出してやります。その男がしたように」

乙「私は飼主にたのんで出してもらつてやります」

丙「私はやはりだまつて出してやつてあとからことわります」

丁「私は出してやりませぬ」

人々で色々を考えがちがう。出してやるというけれど、それでは今までに、飼鳥を見た時、出してやったことがありますか、又こんなことを考えて見たことがありますか、と問うて見ると誰一人出してやったものはいない。やはり机上の空論ではないか。

もし雀がバタバタしないで楽しそうに籠の中で飛び回っていたらどうであろうか。そしたら誰も出してやりたいとは思わないであろう。

小善根

もし私が小鳥を出してやつたら私はすぐ「俺はよいことをした。あの鳥を捕えた男と比べたら俺は善人だ。目覚めた男なのだ」という高慢な心が動きはすまいか。小さい善根が鼻にかかることは、悪人だと泣いていることよりもあさましいことなのだ。

又私が小鳥の前に出た時は、小鳥を可愛相なと思うことよりは、小鳥を苦める人を悪む心が強くはあるまいか。否、小鳥を捕えて飼つて見たい心さえ全く心の内に動いて出ることはないであろうか。ちょうどこれを書いている時、寺の庭の木には目白が三四羽来て美しい声で鳴いている。「とりもちはありませんか。とりもちがあれば捕れるがなあ」という気がします。この騒動を坐して聞いた私は、やはり幾分共鳴して、とりもちがあれば面白からうとさえ思いました。私には、小鳥の側に行つて、だまつて出してやるが思いきつて出来るであろうか。私の内から別なる嫌な気分や、罪悪なしに、出してやるが出来ようか。

形は道ではない

私が「小鳥を出してやつて下さい」と言つて飼主に忠告がましいことを言うことも、それもあまりに自分を高く買った、善人らしい、偽善者にならないでも私には出来るであろうか。浦島太郎は昔、子供の遊ぶ亀を銭を出して買って逃してやったことを聞いた。そして浦島が龍宮で迎えられたことを聞かされて、道徳的功利心をそそられた。そんなことに出会つた時は、義侠的なことをすることを善だと教えられて来た。けれどもこれが何時の場合でも正しいことであろうか。

聖化しきらない私

私どもはともすれば、世の中の色々なことをしでかした人を見れば、「仕方のない奴だ。」と言う目を持って見ようとする。何という不徹底だろう。

「一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり、我が心の善くて殺さぬにはあらず、また害せじと思うとも、百人千人を殺すこともあるべしと仰の候ひしは、吾等が心の善きをば『よし』と思ひ、悪しきことをば『あし』と思ひて」
ほんとのつきつめた罪悪観のないためであろう。

「小慈小悲もなき身にて

有情の利益はおもふまじ

如来の願船いまさずば

苦海をいかでかわたるべき。」(和讃)

私が一つの善を行おうとすれば十の悪をつくる。私には一つの善すら出来ないのだ。自分が常没の、無有出離之縁の悪衆生で、小慈小悲のない身でありながら、善を実行せんと考え、善を行い得るとうぬぼれ、善をなし得たと信じるとは何たるあさましいものであろうか。

善を実行することはもちろんいいことにちがいない。善を実行することがいいということ、私にはしよせん善は実行が出来ないということとは全くちがう。善を実行することは正しいという正札の前では、私どもはいよいよ悪人たるばかりである。

親鸞聖人は、小慈小悲もない凡夫としてひたすら大地にひざまずいて、有情の利益を思つていなさるには、あまりに自分の道が見えすいていた。そうして如来の願船上³の往生人たることをよろこんでいなさった。

仏にまで聖化しきらない者が、善を実行しようと考え、善を実行したと考える時にはそこには毒がまじる。そしてその毒が、善以上に一切を傷つけはすまいか。

愛し得ざる者の道

かくて私はついに小雀二羽すら愛し得ないのであります。私が見たら可愛そうにすら思わなかつたかも知れない。たとえ可愛そうに思ったにしたところが、私は泣きながらどうすることも出来ないのであります。

「慈悲に聖道浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というはものを憫み、悲み育むなり。しかれども、思うが如く助け逐ぐることを極めてありがたし。また浄土の慈悲というは念しかしていそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもて思うが如く、衆生を利益するをいうなり。今生にいかにか愛し不便と思ふとも存知のごとく助け難ければこの慈悲始終なし。しかれば念仏まをすのみぞ末徹りたる大慈悲心にて候ふべきと、云々。」(歎異抄)

愛し得ざる私どもにもたつた一つが与えられます。それは念仏申すことであります。こうした御文も、単に一片の文章として拝読する時には、冷たい概念化であつたり、責任回避の言葉となつてしまひましょう。けれども愛さねばならぬ。しかも愛し得ぬ、生々しい問題に当面した時に、私たちは新しい生命にふれます。こうした何時

までも解くことの出来ぬ地上の矛盾に当面して、それをほどいて進む一道の光の投げられたことに生きかえるのであります。

私は雀を飼った人を批難するのでもありません。又それを逃してやった人をかれこれいうのでもありません。

私には私の道があまりに忙しいのであります。静かに合掌してみ仏に聖化され浄化される道を念じつつ一すじに進まねばなりません。

花を愛する心は美しい心であります。おそらく美しい花を眺めて楽しむことの出来る人はその花のような美しい清い心の人であります。花をながめて花を愛づることの出来る人には何処へ行っても金でかえない美しい世界が開けています。世には花さえ愛し得ぬほどの垢づいた心を持って動いている人がみちています。